

5年2組

 「畑」
～心を耕す～


「苦勞するからこそ」

今年度の5年2組では、「畑」を耕して野菜を育てています。

以下の文章は、算数の振り返りの後半でAさんが綴っていた文章です。

～前略～

水をあげるのがめんどくさいと言っていましたが、自分の手で水をあげるからこそ、苦勞するからこそ、しゅうかくの時にたっせいかんがあるのではないのでしょうか。(Aさん)

プログラミングに長けている教育実習生が、「農業の自動化」の研究を進めており、授業の最後に農薬散布のドローンなどを紹介してくれました。農業が抱える問題に、「高齢化」、「担い手不足」等があります。広い面積の畑を人間の力だけで管理することは効率が悪く、農業の自動化は、これからの農業を支える素晴らしい研究だと感じました。

一方、Aさんの考えもとても共感できます。何も無い荒地を耕し、苦土石灰を入れ、元肥を入れ、土をねかし、畝をつくり、マルチを張り、苗を植え、雨風から小さな苗を守り、土の状態を見て適切に水をやり、脇芽を取り、野菜ごとに仕立て・・・そして収穫を迎える。収穫したときや、食べたときに「達成感」が体中を駆け巡ります。



「苦勞するからこそ感じられる達成感」を味わっているAさんがすばらしいと感じました。「若い時の苦勞は買ってでもせよ」ということわざがあります。苦勞して、乗り越えた先にあるものは、乗り越えた人にしか見ることはできません。苦勞して乗り越えた経験が、人を成長させていくのだと私は思います。

また、苦勞を苦勞と思わず、楽しむポテンシャルも大切だと考えます。

苦勞を惜しまず、自分から動き出せるAさんの姿をこれからも見つめていきたいと思いました。



畑の通路に落ち葉を敷くため、落ち葉を集めました。落ち葉を敷くことで、雨が降ってもぬからず、肥料にもなります。汗と、笑顔が光っていました。



水やり当番などの仕事に責任をもって取り組んでいます。自分の仕事に責任をもち、役割を果たす力が育っています。



教室で「さようなら」をした後、毎日、毎日、畑に向かう子どもたち。電車の時間まで、野菜の様子を見たり、水やりをしたりしています。野菜たちも、毎日来てくれる子どもたちに「ありがとう」と言っているように感じます。

子どもたちは心の中で、野菜にどんなことを話しかけているのでしょうか。「また明日ね」「夕方は風が強いから気をつけてね」「おいしかったよ」「元気に育ってね」。

畑は、子どもたちの心を豊かに耕してくれているように感じています。